

『ジャータカ』の伝播と変容 ver 2.1-2012-02-21; ver 2.0-20110129

I 仏教のブツダ観:ブツダとは何か?

ブツダをどのように理解するかは、仏教にとって核心的な問題の一つであり、仏教の歴史的变化とともにその理解も変わってきた。この問題は仏教内部では仏身論と呼ばれる。

1. 一仏主義、歴史的ブツダ:初期仏教から上座部仏教の流れ

- 1) 釈迦牟尼(Sākyamuni). ゴータマ・ブツダ(Gotama Buddha).
- 2) 歴史的に一度だけこの世界に出現した人間。→「仏伝」
- 3) ブツダになるまで、菩薩として無数の生をくりかえした。→「ジャータカ」
「ジャータカ」は、ブツダの生き方を理想のモデルとするブツダ崇拜の一部である。したがって、(大乘仏教にも傳承されてはいるが)上座部仏教において重要な位置を占める。

2. 神格化されたブツダ

- 1) ブツダに対する信仰の深化→超人的ブツダ観。「仏伝」の神話化と「ジャータカ」の増大
- 2) ブツダのシンボルへの崇拜→仏塔崇拜(ストゥーパ「卒塔婆」). 遺灰, 仏牙.

3. 大乘的ブツダ:多仏主義

前1世紀頃から、在家信者を中心とした新しい仏教運動が現れた。彼らは自らを、ブツダの真の教えに戻る「大乘」とよび、保守的な仏教徒を「小乗」と貶めた。

- 1) すべての人はブツダになる可能性を持っている。すべての人は潜在的に菩薩である。
過去七仏、三世十方世界のブツダ。大乘の菩薩:自利利他。
例:阿弥陀仏(Amitāyus, Amitābha). 法蔵菩薩(Dharmākara)の修行の結果。「報身」としてのブツダ。
例:観(世)音菩薩(Avalokiteśvara). ブツダになれるにもかかわらず、この世界にとどまって人々を救う。
- 2) ブツダが説いた真理は永遠に存在する。その擬人化を「法身(ほっしん)」としてのブツダという。
例:大日如来(Vairocana).

参考図書(仏教に関するもの)

- 石井米雄『タイ仏教入門』(めこん, 1991)タイにおける上座部仏教の最良の案内。
中村元ほか『岩波仏教辞典』(岩波書店, 1989年)
水野弘元『仏教要語の基礎知識』(春秋社, 1972年)

II ジャータカの構造:「テキスト」「語り」「物語」

ジャータカの構造を「テキスト」「語り」「物語」という三つのレベルで考える。「ローヒニー・ジャータカ」(J45)と「兎ジャータカ」(J316)を例に取り上げる。

1. 「テキスト」の種類

ジャータカ(jātaka, 本生経)物語とジャータカ物語集。経・律。論。書承と浮彫。

- 1) パーリ語『ジャータカ』。22篇547話。1世紀頃。
- 2) サンスクリット語『ジャータカ・マーラー』(Jātakamālā)35話。2世紀。
- 3) 漢訳『六度集経』91話。2世紀頃。

2. 「語り」の形式

- 1) 現在物語:どのような機会にブツダが物語を語ったかを記す部分。語り手=ブツダ
- 2) 過去物語:ブツダの前生物語。ジャータカの主要部分。散文と韻文からなる。
- 3) 連結:再び現在に戻り、過去物語の登場者と現在物語の人物とを結びつける。登場者の一人は必ずブツダ本人である。

3. 「物語」の思想

波羅蜜(pāramitā):菩薩の基本的実践徳目。布施, 持戒, 忍辱(にんにく), 精進, 禅定, 智恵。

参考図書(ジャータカに関するもの)

- 岩本裕『インドの説話』(紀伊國屋書店, 初版1963, 復刻版1994)インド起源の仏教・非仏教説話の日本とヨーロッパへの伝播を解説。専門的だが読みやすい。
中村元・監修『ジャータカ全集』全10巻(春秋社, 1982-91年)パーリ語ジャータカの完訳。
干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』(山喜房仏書林, 1978年)ジャータカの専門的研究書。
干潟龍祥『ジャータカ概観』(春秋社, 初版1961年。改訂増補版1981年)上記の普及版。

III ウサギ本生物語の伝播と変容

ウサギ本生物語を例にとって、インドからインドネシア、中国、日本への伝播と変容の跡をたどる。

サンスクリット:śaśa=ウサギ. śaśin=(ウサギをもつもの)月

1. パーリ語ジャータカ第316話

- 1) ウサギ(=菩薩), サル, ヤマイヌ, カワウソ.
- 2) インドラ神(帝釈天)がウサギの誠心を試す.
- 3) インドラ神はウサギの徳が人々の心に残るようにとその姿を月に描く.

英訳テキスト: <http://www.sacred-texts.com/bud/j3/j3017.htm>

2. 『大唐西域記』

- 1) インドに陸路で旅した唐の仏僧玄奘の記録. 7世紀前半. 第7卷「バーラーナシー国の条」
- 2) ウサギ, サル, キツネ. インドラ神がウサギを試みる. ウサギは死ぬ.

3. 『今昔物語』

- 1) 11末-12世紀初. 平安後期の説話集. 天竺・震旦・本朝の3部構成. 第5巻第13話.
- 2) ウサギ, キツネ, サル. ウサギは死ぬ.

4. ボロブドゥール寺院の浮彫

- 1) 760-860年頃. 中部ジャワ. シャイレーンドラ王朝が建設した大乘仏教寺院.
- 2) 6層の方形壇と3層の円形壇からなる段丘ピラミッド形式. 432体の仏像. 1300面の浮彫.
- 3) 第1回廊主壁下段, 欄楯上下段から第2回廊欄楯にかけて720面の前生話と譬喩経.
- 4) 第1回廊欄楯上段23-25面. サンスクリット『ジャータカマーラー』第6話「ウサギ本生」.

参考図書(ウサギ本生物語に関するもの)

小林信彦「ブッダが兎であった時の話:中国語ヴァージョンに見られる仏教説話の複雑な展開」『桃山学院大学人間科学』25, 77-100, 2003年.

小林信彦「兎が火に飛び込む話の日本版:他のヴァージョンにはない発想と筋運び」『桃山学院大学人間科学』30, 3-50, 2004年.

水谷真成・訳『大唐西域記』(中国古典文学大系第22巻. 平凡社, 1971年).

資料1 ボロブドゥール寺院の浮彫 (24面と25面)



資料2 今昔物語集巻第5

三の獸、菩薩道を行じ、兎身を焼くこと、第十三

今は昔、天竺に兎・狐・猿、三の獸有て共に誠の心を發して菩薩の道を行ひけり。

各思はく、「我等前世に罪障深重にして賤き獸と生れたり。此、前世に、生有る者を哀ばず、財物を惜しみて人に与へず。此くの如くの罪深くして地獄に墮ちて苦を久しく受けて残りの報にかく生れたる也。然れば此の度、此の身を捨てむ」。

年、我より老いたるをば祖(おや)の如くに敬ひ、年、我より少し進みたるをば兄の如くにし、年、我れより少し劣りたるをば弟の如く哀び、自らの事をば捨てて、他の事を前とす。

天帝尺(てんたいしゃく)、此れを見給ひて、「此等、獸の身也と云へども、有難き心也。人の身を受たりと云へども、或は生きたる者を殺し、或は人の財を奪ひ、或は父母を殺し、或は兄弟を讎敵(あたかたき)の如く思ひ、或は咲(ゑみ)の内にも悪しき思ひ有り、或は戀ひたる形にも嗔(いか)れる心深し。何に況(いはむ)や、此の如きの獸は、實の心深く思ひ難し。然れば試みむ」と思ひて忽に老たる翁の無力にして羸(つか)れ術無氣(ずつなげ)なる形に變じて、此の三の獸の有る所に至り給ひて宣はく、「我、年老ひ羸れて為む方無し。汝達、三の獸、我を養ひ給へ。我、子無く家貧しくて食物無し。聞けば、汝達、三の獸、哀みの心深く有り」と。

三の獸、此の事を聞きて云く、「此、我等が本の心也。速やかに養ふ可し」と云ひて、猿は木に登りて、栗・柿・梨子(なし)・棗・柑子・橘・[こくは]・椿・栗・郁子(むべ)・山女(あけび)等を取りて持て来り、里に出でては瓜・茄子・大豆・小豆・大角豆(ささげ)・粟・稗(ひえ)・黍(きび)等を取りて持て来りて好みに随ひて食せ令む。

狐は墓屋(つかや)の邊に行きて人の祭り置たる菜(しとぎ)・炊交(かしぎがて)・鮑(あはび)・鯉、種々の魚類等を取りて持て来りて思ひに随ひて食せ令むるに、翁既に飽満しぬ。

此の如くして日来を経るに、翁の云く、「此の二の獸は實に深き心有りけり。此、既に菩薩也けり」と云ふに、兎は勵(はげみ)の心を發して燈を取て、香を取りて、耳は高く偃(くぐせ)にして、目は大きに、前の足短かく、尻の穴は大きに開て、東西南北求め行けども、更に求め得たる物無し。

然れば猿・狐と翁と且(かつ)は耻ぢしめ、且は蔑づり咲ひて勵ませども力及ばずして、兎の思はく、「我、翁を養はむが為に野山に行くと云へども、野山怖しく破(わり)無し。人に殺され、獸に[くらは]るべし。徒に、心に非ず、身を失ふ事量無し。只如かじ、我今、此の身を捨てて、此の翁に食はれて永く此の生を離れむ」と思ひて、翁の許に行きて云く、「今、我、出でて甘美の物を求めて来らむとす。木を拾ひて焼(たき)て待ち給へ」と。

然らば猿は木を拾ひて来ぬ。狐は火取りて来りて焼(た)き付けて、若しやと待つ程に、兎、持つ物無くして来れり。

其の時に猿・狐、此を見て云く、「汝何物をか持て来るらむ。此、思ひつる事也。虚言(そらごと)を以て人を謀(たばかり)て木を拾はせ火を焼せて、汝火を温まむとて、[あなに]く」と云へば、兎、「我、食物を求めて持て来るに力無し。然れば只我が身を焼きて食ひ給ふ可し」と云て、火の中に踊り入りて焼け死にぬ。

其の時に天帝釋(てんたいしゃく)、本の形に復して、此の兎の火に入りたる形を月の中に移して、普(あまね)く一切の衆生に見令めむが為めに月の中に籠め給ひつ。

然れば月の面に雲の様なる物の有るは此の兎の火に焼けたる煙也。亦、月の中に兎の有ると云は此の兎の形也。万の人、月を見む毎に此の兎の事思ひ出づ可し。